千葉県八千代市

川崎山遺跡

（かわさきやま）

－ｆ地点埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 20 年度

杉山　芳子

八千代市遺跡調査会

例　　言

1　本書は，杉山芳子氏による共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県八千代市萱田町字川崎山759の一部に所在する川崎山遺跡（遺跡番号八千代市241）ｆ地点にかかるものである。

3　発掘調査から報告書作成にいたる業務は杉山芳子氏の委託を受け，八千代市遺跡調査会が実施した。

4　発掘調査及び整理作業は，下記の期間に実施した。

確認調査	平成10年８月６日 ～ 平成10年８月14日	八千代市教育委員会直営調査	
本調査	平成10年11月11日 ～ 平成10年12月14日	担当	蕨　茂美
整理作業	平成10年12月15日 ～ 平成10年12月22日	担当	蕨　茂美
	平成20年７月１日 ～ 平成20年８月31日	担当	秋山利光

5　整理作業は，実測・トレース・遺物の写真撮影を深谷 昇が行い，執筆・編集を秋山が行った。
第1図から第4図及び第16図は，コンピューター上で描画ソフトにより作図したものを用いている。

6　本遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面，写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管している。

7　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

第 1図　国土地理院発行　1/50,000「佐倉」（平成10年発行）

第 2図　大日本帝国陸地測量部発行　1/20,000「下志津原」（明治36年測図・明治43年発行）

第 3図　八千代市発行　1/2,500八千代都市計画基本図No.19・No.24（平成13年修正）

第16図　八千代市発行　1/2,500八千代都市計画基本図No.19・No.24（昭和60年修正）

をそれぞれ，加筆・修正している。

8　本書の遺構実測図における用例は，以下のとおりである。

⑴方位は座標北を表している。また，基準点は平成14年の測量法改正以前であったため，日本測地系に基づく平面直角座標系（公共座標系）第IX系によって設定されている。現在の世界測地系に基づく平面直角座標系に変換するには補正が必要となる。

⑵遺構図面の縮尺は竪穴住居跡を1/60，カマドを1/40とした。

⑶遺構図中の一点鎖線は床硬化範囲を表す。記号及びスクリーントーン等は図中に凡例を示すこととした。

9　本書の遺物実測図における用例は，以下のとおりである。

⑴図面の縮尺は基本的に以下のとおりとした。しかし，編集の都合上適時変更し，必要に応じて図中に記載した。

大形完形土器実測図　1/4　　小形完形土器実測図　1/3

土器片拓影図・土製品実測図　1/2　　石器・石製品実測図　1/2

⑵図中の網掛けは以下のとおりとした。

須恵器断面　縄文土器・弥生土器・土師器断面　灰釉　黒色

⑶遺物の観察表中の（　）は復元推定値を表し，〔　〕は現存値を表している。

目　　次

例　言
目　次　挿図目次・表目次・図版目次
第Ⅰ章　遺跡の概要と調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の立地と本跡調査の概要 …… 1
　第３節　周辺の遺跡 …… 4
　第４節　調査の概要 …… 7
第Ⅱ章　調査の成果 …… 10
　第１節　竪穴住居跡 …… 11
　　１号住居跡 …… 11
　　２号住居跡 …… 14
　第２節　遺構外出土遺物 …… 18
第Ⅲ章　まとめ …… 19
報告書抄録　巻末

挿 図 目 次

第 1図　川崎山遺跡の位置と周辺の遺跡
第 2図　川崎山遺跡の立地と周辺の地形 …… 2
第 3図　川崎山遺跡各調査地点 …… 3
第 4図　確認調査のトレンチ配置と検出遺構 …… 7
第 5図　調査区の基本土層 …… 8
第 6図　ｆ地点全測図 …… 10
第 7図　1号住居跡 …… 11
第 8図　1号住居跡カマド …… 12
第 9図　1号住居跡出土の炭化材と焼土範囲 …… 12
第10図　1号住居跡出土遺物 …… 13
第11図　2号住居跡 …… 15
第12図　2号住居跡カマド …… 15
第13図　2号住居跡出土遺物（1） …… 15
第14図　2号住居跡出土遺物（2） …… 16
第15図　遺構外出土遺物 …… 18
第16図　川崎山遺跡の奈良・平安時代の住居跡検出状況 …… 21

表　目　次

第 1表　川崎山遺跡の検出遺構 …… 3
第 2表　川崎山遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡 …… 5
第 3表　川崎山遺跡ｆ地点　検出遺構一覧 ……10
第 4表　1号住居跡出土遺物観察表(1) ……13
第 5表　1号住居跡出土遺物観察表(2) ……14
第 6表　2号住居跡出土遺物観察表 ……17
第 7表　遺構外出土遺物観察表 ……18
第 8表　川崎山遺跡ｆ地点　竪穴住居跡比較 ……19

図 版 目 次

図版１
１．遺跡遠景　２．調査区近景
３．本調査作業風景　４．本調査区域　東側より
５．本調査区域　南西側より　６．１号住居跡
７．１号住居跡南北土層　８．１号住居跡東西土層
図版２
１．１号住居跡遺物出土状況　２．１号住居跡北東隅遺物出土状況
３．１号住居跡カマド土層　４．１号住居跡カマド
５．２号住居跡　６．２号住居跡南北土層
７．２号住居跡東西土層　８．２号住居跡カマド
図版３　１号住居跡出土遺物
１．１号住居跡１　２．１号住居跡２
３．１号住居跡３　４．１号住居跡４
５．１号住居跡７　６．１号住居跡９
７．１号住居跡５・８・11　８．１号住居跡出土遺物
図版４　２号住居跡出土遺物・遺構外出土遺物
１．２号住居跡２　２．２号住居跡５
３．２号住居跡６　４．２号住居跡１・３・４・７
５．２号住居跡８・９・10・11・12　６．遺構外出土遺物１
７．遺構外出土遺物２・３・４・５・６　８．ｆ地点主要出土遺物

第1図　川崎山遺跡の位置と周辺の遺跡

1.勝田大作遺跡　2.内込遺跡　3.高津新山遺跡　4.池の台遺跡　5.白幡前遺跡　6.井戸向遺跡　7.坊山遺跡　8.北海道遺跡　9.権現後遺跡　10.菅地ノ台遺跡
11.白筋遺跡　12.浅間内遺跡　13.村上込の内遺跡　14.名主山遺跡　15.殿内遺跡　16.境作遺跡　17.西山遺跡　18.桑納遺跡　19.桑橋新田遺跡
20.本郷台遺跡　21-1.桑納川遺跡群高本弁天下地点　21-2.金堀橋地点　21-3.高古橋地点　22.仲ノ台遺跡　23.芝山遺跡　24.桑納前畑遺跡　25.島田遺跡
26.島田込の内遺跡　27.間見穴遺跡　28.松原遺跡　29.真木野遺跡　30.瓜ヶ作遺跡　31.東山久保遺跡 32.真木野向山遺跡 33.佐山台遺跡　34.子の神台遺跡
35.原内遺跡　36.神久保寺台遺跡　37.上谷遺跡　38.栗谷遺跡　39.向境遺跡　40.境堀遺跡　41.雷遺跡　42.役山東遺跡　43.鄙遺跡　44.おおびた遺跡
45.南谷遺跡　46.先崎西原遺跡　47.西ノ台遺跡　48.上座貝塚B地区遺跡　49.上志津西野遺跡　50.上志津芋窪遺跡　51.岩戸広台遺跡　52.トヶ前遺跡
53.松崎遺跡群　54.向ノ地遺跡　55.船尾町田遺跡　56.船尾台幡遺跡　57.鳴神山遺跡　58.白井谷奥遺跡　59.西根遺跡　60.北の台遺跡　61.稲ヶ作遺跡
62.北之崎遺跡　63.高津遺跡

第Ⅰ章　遺跡の概要と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

平成10年4月20日，土地所有者　杉山芳子氏から八千代市萱田町字川崎山759の一部の区域2,784.82㎡に共同住宅建設を目的とした「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」照会が提出された。

照会を受けた八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）が現地踏査を行ったところ，現況は大半が急傾斜地をなす山林であり，遺物の散布を確認することができなかった。しかし，照会地が周知の遺跡の範囲内であり，また，周辺区域で数多くの調査の実績があり，しかも，多数の遺構が検出された調査区域に隣接していたため，同年4月30日，市教委は急傾斜地を除く1,550㎡について弥生・古墳時代遺物包蔵地として，埋蔵文化財が所在するものと判断し，回答した。

平成10年7月7日，工事施行責任者であり工事主体者となる大成ロテック株式会社　東関東支社をとおして，杉山芳子氏から埋蔵文化財が所在する区域，1,550㎡に対して，文化財保護法（以下「法」という。）第57条の2第1項の規定による土木工事の発掘届が提出された。市教委は遺跡の性格と遺構の所在を把握するため，法第98条の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知を千葉県教育委員会に提出し，同年8月6日から8月14日まで国庫補助事業として確認調査を実施した(注1)。この調査の結果，土師器などが出土し，平安時代の竪穴住居跡など5ヶ所が検出された。これにより，遺構の検出された区域82㎡に対して保存措置を講じることとなった。

市教委と事業者は協議により，現状での保存が困難であり，発掘調査を実施し記録保存することで合意に達した。平成10年10月1日，土地所有者と調査主体となる八千代市遺跡調査会及び市教委の三者により保存措置に関する協定が締結された。また同日，土地所有者及び八千代市遺跡調査会との間で記録保存するための発掘調査に関する委託契約が締結された。

八千代市遺跡調査会は調査対象区域について，法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届を同年11月9日，市教委に提出し，準備の整った同年11月11日，本調査を開始した。

（注1）確認調査の概要については「千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度」参照

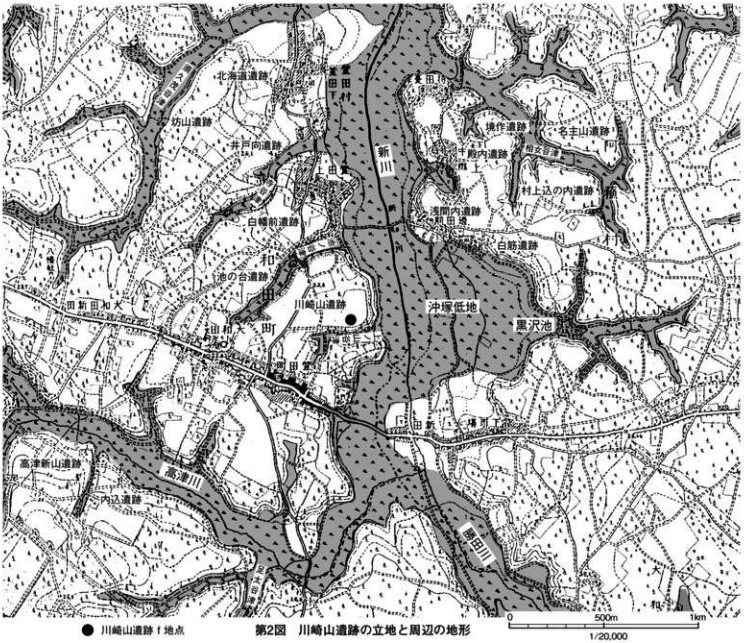
第２節　遺跡の立地と本跡調査の概要

八千代市は千葉県北西部に位置する。千葉市の中心部まで約13km，都心までは約30kmの距離にあり，昭和42年の市制施行以来，首都圏のベッドタウンとして発展してきた。

川崎山遺跡は八千代市南部，新川の西岸の萱田町に所在する。

新川は長沼一帯を源に持ち，印旛沼水系に属する。流れは北あるいは北西に流下し，宇那谷・勝田を経て大和田付近で勝田川から新川と名前を変える。新川は現在，大和田付近で江戸時代から開削が行われてきた堀割りが，東京湾に流れ込む花見川に分水界を越えてつながっているが，本来はさらに北に流れ，桑納川と合流し平戸付近で流れが東に変わり神崎川と共に印旛沼に流れ込んでいる。

本跡は成田街道（現国道296号線）の北側にあり，新川から黒沢池に向かって広がる沖塚低地に面している。地形的には北側を池ノ谷津，南側を上ノ山谷津に挟まれ，およそ19haの広範な台地上に立地している。この台地は下総下位面で形成され，標高24m前後の平坦面である。（第2図）



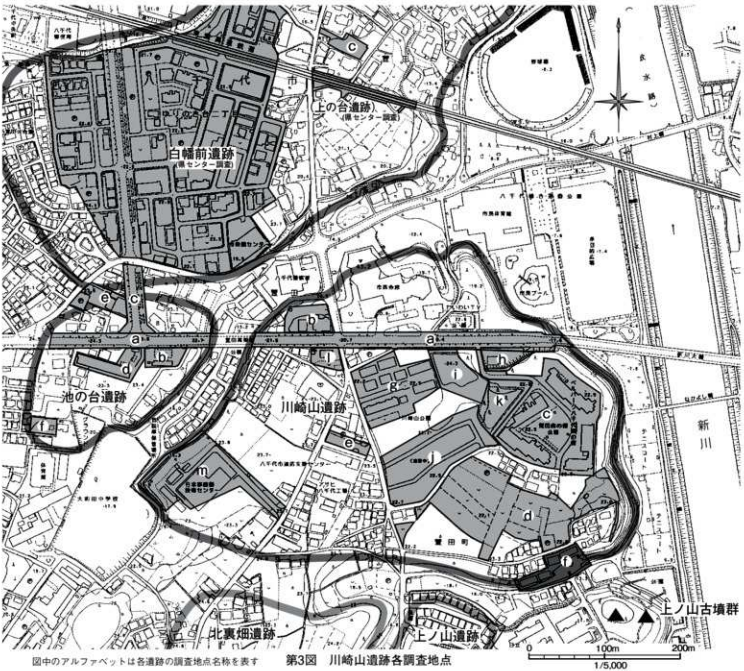
● 川崎山遺跡ｆ地点

第2図　川崎山遺跡の立地と周辺の地形

今回の調査区であるｆ地点は遺跡の南端の上ノ山谷津に面する急傾斜地際に立地している。

本跡はａ地点調査時前までは「萱田遺跡」(注1) あるいは「萱田町遺跡」(注2) と呼称されていた。しかし，この時期に，財団法人千葉県文化財センターが調査中であった「萱田遺跡」（調査当初はこの遺跡名で調査されていた。）との混同をさけるため，「萱田町川崎山遺跡」に改められた(注3)。ｂ地点並びにｃ地点確認調査及び本調査時まではこの名称で調査が行われていた。しかし，平成9年に刊行された「千葉県埋蔵文化財分布地図」(注4) により，現在の「川崎山遺跡」に変更されたため，ｃ地点本調査の報告書についてはこれに従った。このような経過により，本跡には複数の遺跡名が存在することとなった。

本跡は昭和54年3月に調査が行われて以来，確認・本調査が繰り返し行われてきた区域である。現時点で14地点の調査が行われている。未報告のｎ地点は整理中のため省略するが，大きな台地全体の遺跡の状況を把握することが概ねできている。



図中のアルファベットは各遺跡の調査地点名称を表す　　第3図　川崎山遺跡各調査地点

第1表　川崎山遺跡の検出遺構

地点		縄文時代							弥生時代		古墳時代			奈良・平安	調査年月等
		草創	早	前	中	後	晩		前	中	後	前	中	後		
a 地点	住居跡										4		3			確S54.3　本S54.4
b 地点	陥穴				1											確本H4.4
c 地点	住居跡										13	10	26	2	2	確E5.9
	土坑等				7											本H6.4
	陥穴				6											
d 地点	住居跡										5	19	1		1	確H9.1
	掘立建											2				確2H10.2
	土坑等				48							11				本H4.5
	陥穴				17											
e 地点	土坑等				1											確本H9.9
f 地点	住居跡														2	確H10.8　本H10.11
g 地点	陥穴				4											確本H1.2
h地点	住居跡										3		2			確H1.4
	土坑等													1		本H1.5
i 地点	住居跡															確本H1.8
j 地点	陥穴				3											確本H1.10　本H8.4
k 地点	住居跡										1					確H8.3　本H8.4
l 地点	住居跡															確本H8.6　溝3条
m地点	住居跡				4						1				1	確H9.3
	土坑等				7										3	本H9.5
住居跡合計		0	0	0	4	0	0	0	0	27	29	32	2		6	

縄文時代の状況は早期から後期まで断続的に遺物の出土がみられるが，遺構数は極めて少ない。竪穴住居跡としては，m地点で検出された中期阿玉台期のものが4軒あるが，他には検出されていない。また，時期を特定することは難しいが，31基の陥穴が散在している。

弥生時代は後期の竪穴住居跡が27軒検出されている。また，弥生時代末から古墳時代前期にかけて，竪穴住居跡が29軒検出されている。古墳時代中期の住居跡では32軒が検出され，台地北側の住居跡から石製模造品の製作跡が検出されている。後期になると2軒と急激に減少する。

奈良・平安時代をとおして，検出されている竪穴住居跡は今回の調査区で検出された2軒の住居跡を含めて6軒と少ない。

（注1）八千代市教育委員会　昭和47年　「八千代市遺跡分布調査概要」
（注2）八千代市　昭和53年　「八千代の歴史　付録2．八千代市文化財所在地一覧表」
（注3）村田一男　昭和54年　「萱田町川崎山遺跡　第2章第1節」　八千代市遺跡調査会・八千代市
　　八千代市教育委員会　昭和58年　「八千代の遺跡　－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－」
（注4）財団法人 千葉県文化財センター　平成9年　「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)　―東葛飾・印旛地区改訂版－」

第３節　周辺の遺跡

今回の調査区で検出された遺構・遺物が平安時代を主体としているため，ここでは奈良・平安時代を中心に周辺の遺跡について概観する。

本跡の北側には萱田遺跡群が広範囲に展開する。**白幡前遺跡**(5)では8世紀初頭から10世紀初頭までの期間に300軒以上の竪穴住居跡と150棟以上の掘立柱建物跡が検出されている。白幡前遺跡の南端には小さな谷津を隔てて**池ノ台遺跡**(4)が所在し，竪穴住居跡9軒と掘立柱建物跡1棟という小規模な平安時代の集落が検出されている。**北海道遺跡**(8)，**井戸向遺跡**(6)，**坊山遺跡**(7)はひとつの大きな台地に展開しているが，須久茂谷津側と寺谷津側にそれぞれ100軒ほどの竪穴住居跡で形成される集落が検出されている。しかし，掘立柱建物跡は両集落合わせても50棟ほどと少ない。台地の西側に立地する坊山遺跡では2軒の竪穴住居跡がこれらの集落から離れて検出されている。**権現後遺跡**(9)は新川寄りの区域に69軒の竪穴住居跡と18棟の掘立柱建物跡が検出されているが，新川に面して**菅地ノ台遺跡**(10)が所在し，同様に竪穴住居跡と掘立柱建物跡が多数検出されており，同一の集落を形成しているとみることができる。

本跡南方で西側から新川に合流する高津川南岸に**高津新山遺跡**(3)と**内込遺跡**(2)が隣接して所在している。高津新山遺跡は未報告のため正確ではないが，110軒以上の竪穴住居跡と20棟以上の掘立柱建物跡が検出されている。また，小さな谷津を隔てた内込遺跡では7軒の竪穴住居跡と3棟の掘立柱建物跡が検出されている。高津川流域ではさらに上流で2軒の平安時代の住居跡を検出した**高津遺跡**(63)が昭和44年に調査されている。

本跡に面する新川の対岸には，村上団地造成時に検出された**村上込ノ内遺跡**(13)が新川から谷津のやや奥まったところに所在している。検出された155軒の竪穴住居跡と24棟の掘立柱建物跡は8世紀中葉から9世紀末までの期間存続していたとみられる。この遺跡に面する相女谷津を隔てた対岸には**名主山遺跡**(14)が所在し，7軒の竪穴住居跡と6棟の掘立柱建物跡が検出されている。新川沿岸には**境作遺跡**(16)，**殿内遺跡**(15)，**浅間内遺跡**(12)が同じ台地上に連なって所在する。境作遺跡（未報告）では8軒ほどの竪穴住居跡が検出されている。また，殿内遺跡（未報告）でも20軒以上の竪穴住居跡と2棟以上の掘立柱建物跡が確認さ

第2表　川崎山遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡

本表の№は第1図及び第3節の本文中に表示した遺跡ナンバーを表す

№	遺跡名	所在地	遺跡№	奈良・平安時代		調査年	特徴
				住居跡	掘立		
1	勝田大作遺跡	八千代市勝田字大作	254	2		S60	
2	内込遺跡	八千代市八千代台北字内込	246	7	3	H9，H14	
3	高津新山遺跡	八千代市高津字堀込	239	111	21	S60～H1	製鉄遺構
4	池の台遺跡	八千代市萱田字池ノ台	240	9	1	S54，S57，S60，H9	
5	白幡前遺跡	八千代市萱田字白幡前	185	297	155	S56～S58	鍔，刀子，墨書土器，井戸2，地鎮関係，H，鉄滓，馬骨
5	（上ノ台遺跡）	八千代市萱田字上ノ台	185	14	1	H2～H3	白幡前遺跡と統合
6	井戸向遺跡	八千代市萱田字井戸向	284	95	44	S55～S56，S57，H17	井戸10，地下式坑24，帯金具，小仏像
7	坊山遺跡	八千代市萱田字坊山	282	4		S58	貝
8	北海道遺跡	八千代市萱田字北海道	183	114	10	S54～S55	
9	権現後遺跡	八千代市萱田字権現後	171	69	18	S52～S57，H7	
10	菅地ノ台遺跡	八千代市萱田字菅地ノ台	179	26	18	S63，H1，H4，H5 H7～H9，H16	
11	白筋遺跡	八千代市村上字白筋	208	2	2		
12	浅間内遺跡	八千代市村上字浅間内	204	59	6	H6～H16	帯金具，鋼椀など
13	村上込ノ内遺跡	八千代市村上字込ノ内	210	155	24	S48	
14	名主山遺跡	八千代市村上字向原	205	7	6	S46	
15	殿内遺跡	八千代市村上字殿内	203	34	1	S60，H2～H3，H4，H17	
16	境作遺跡	八千代市村上字境作	202	8		S60	
17	西山遺跡	八千代市村上字西山	196	3		H2～H3	
18	桑納遺跡	八千代市桑納字東割	57	○		S58～S59	
19	桑横新田遺跡(桑横遺跡)	八千代市桑横字宮山	59	1		S51	環濠?，鉄鏃，勾玉，ガラス玉，刀子
20	本郷台遺跡	八千代市桑横字本郷台	65	1		H14	
21	桑納用遺跡群	八千代市桑横地先					
22	仲ノ台遺跡	八千代市大和田新田字仲ノ台	158	4		S62，S63	
23	大和田新田芝山遺跡	八千代市大和田新田字芝山	159	9		S60，S62	製鉄炉，鍛冶炉（住居跡内）
24	桑納前畑遺跡	八千代市桑納字前畑	53	3	11	S52，S53	2次は睦小学校遺跡　9C前半
25	島田遺跡	八千代市島田字西台	52	1		S53	
26	島田込の内遺跡	八千代市島田字込ノ内	48	14		H5～H6，H15	
27	間見穴遺跡	八千代市島田台字間見穴	28	47	16	H15～H16	
28	松原遺跡	八千代市真木野字松原	11	18	22	S61～S62，S62	保存区域に6軒以上あり
29	真木野遺跡	八千代市真木野字台	10	2		S62	確認　平安5軒
30	瓜ヶ作遺跡	八千代市真木野字瓜ヶ作	267	2		S62	柱穴列，堀1
31	東山久保遺跡	八千代市真木野字東山久保	24	1		S62，H17	溝文2軒
32	真木野向山遺跡	八千代市真木野字向山	23	2		S60～S61，H1	
33	佐山台遺跡	八千代市島田台字佐山台	22	5		S63～H1	道路跡など9条，掘立9軒
34	子の神台遺跡	八千代市佐山字子ノ神台	16	1		S53	
35	原内遺跡	八千代市島田台字原内	32	○		H3	確認　弥生～古墳前2，平安5軒
36	神久保寺台遺跡	八千代市神久保字寺台	7	○		H10	確認調査　平安1軒
37	上谷遺跡	八千代市保品字上谷	77	243	194	H4～H10	
38	栗谷遺跡	八千代市保品字栗谷	75	55	13	S63～H6	
39	向境遺跡	八千代市神野字向境	98	62	27	H4～H8	
40	境堀遺跡	八千代市神野字境堀	73	21	18	H4～H10	
41	富遺跡	八千代市米本字富	106	○		H4，H5	
42	役山東遺跡	八千代市米本字役山	105	1		H5，H6，H19	
43	郷遺跡	八千代市保品字郷	79	○		H11	確認調査　平安25軒
44	おおびた遺跡	八千代市保品字垣賀	86	3		S48	
45	南谷遺跡	八千代市保品字南谷	270	1		H6，H10	
46	先崎西原遺跡	佐倉市先崎字西原	佐倉市1	13		H10，H12	

れている。新川に面する浅間内遺跡では59軒の竪穴住居跡と6棟の掘立柱建物跡が検出されている。これらは7世紀末から9世紀中葉までの集落とされている。隣接する**白筋遺跡**(11)でも1軒の竪穴住居跡が単独で検出されている。

桑納川北岸は大規模な調査が行われていないため，まとまった集落としては捉えられていない。**本郷台遺跡**(20)で1軒，**桑橋新田遺跡**(19)でも1軒，**桑納遺跡**(18)で数軒の竪穴住居跡が検出されている。近年，桑納川上流の川底から縄文土器や平安時代の土師器などが多量に出土していることが明らかとなった。これらは**桑納川遺跡群**(21)として，近年注目されている。またこの周辺の台地上には**北之崎遺跡**(62)や**稲ヶ作遺跡**(61)などの奈良・平安時代の遺跡が所在するとみられている。

現時点では桑納川南岸沿いに集落の検出はみられないが，花輪谷津の奥まった台地上に**芝山遺跡**(23)と**仲之台遺跡**(22)が検出されている。芝山遺跡では製鉄炉が1基検出されており，また住居跡内からも鍛冶に関する遺構が検出されている。

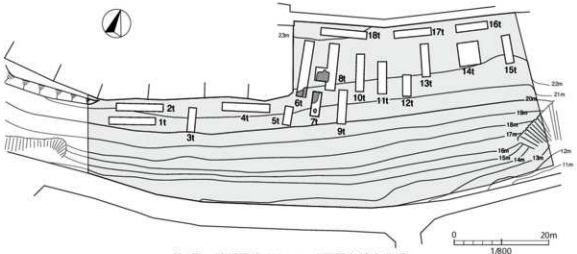
新川西岸には**桑納前畑遺跡**(24)，**島田遺跡**(25)，**島田込の内遺跡**(26)，**間見穴遺跡**(27)などが断続的に所在するが，それぞれの集落の全体像は明らかにはなっていない。桑納前畑遺跡では3軒の竪穴住居跡と11棟の掘立柱建物跡が検出されている。遺構の検出された状況では掘立柱建物の構成する比率が高い。島田遺跡は鉄塔部分の調査であったが，1軒の竪穴住居跡が検出されている。島田込の内遺跡では14軒の竪穴住居跡が検出されている。掘立柱建物跡も1棟確認されている。間見穴遺跡では20軒の竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡が検出されている。

印旛沼に西方から流れ込む神崎川の南岸には**真木野遺跡**(29)，**松原遺跡**(28)，**瓜ヶ作遺跡**(30)，**東山久保遺跡**(31)，**真木野向山遺跡**(32)，**佐山台遺跡**(33)が立地し，台地先端には**子の神台遺跡**(34)が所在する。真木野遺跡では2軒の竪穴住居跡が検出され，周辺にも5軒の住居跡が確認されている。松原遺跡では18軒の竪穴住居跡と22棟の掘立柱建物跡が検出されている。瓜ヶ作遺跡では2軒の竪穴住居跡の検出がみられる。真木野向山遺跡で2軒，東山久保遺跡で1軒，佐山台遺跡で5軒の竪穴住居跡が検出されている。この一帯は，調査密度の高い区域であるが，この時期の住居跡の検出は多くない。子の神台遺跡では1軒の竪穴住居跡が検出されている。

印旛沼の南岸の神野・保品地区には**上谷遺跡**(37)，**栗谷遺跡**(38)対岸の台地には**向境遺跡**(39)，**境堀遺跡**(40)が所在している。上谷遺跡では243軒の竪穴住居跡と194棟の掘立柱建物跡が検出されている。「コ」の字状に展開する掘立柱建物群が注目されている。また，帯金具，温石，長文の墨書土器など遺物も豊富に出土している。隣接する栗谷遺跡でも55軒の竪穴住居跡と13棟の掘立柱建物跡が検出されている。向境遺跡・境堀遺跡では83軒の竪穴住居跡と45棟の掘立柱建物跡が検出されている。これら神野・保品遺跡群の遺構密度の高さと上谷遺跡で出土した「村神郷」と記された墨書土器が注目される。

その他印旛沼南岸には**郷遺跡**(43)，**おおびた遺跡**(44)，**南谷遺跡**(45)，**先崎西原遺跡**(46)などで遺構が検出され，それぞれ大規模な集落の可能性も想定される。

神崎川の北岸では，**鳴神山遺跡**(57)，**船尾町田遺跡**(55)，**船尾白幡遺跡**(56)，**白井谷奥遺跡**(58)が調査されており，古代印旛郡船穂郷の中心的な集落とみられている。これらの遺跡に近接する沖積地で**西根遺跡**(59)が調査されている。この沖積地の調査で，古墳時代から続く水路と同時に宗教的な行為の痕跡が検出されている。



第4図　確認調査のトレンチ配置と検出遺構

第４節　調査の概要

確認調査の概要

確認調査は前述のとおり，平成10年8月6日から同年8月14日まで八千代市教育委員会により行われた。調査対象面積1,550㎡に対して，トレンチの掘削により209㎡が調査された。検出された遺構は平安時代の住居跡3軒，内1軒にカマドを確認した。その他に時期不明の硬化範囲が1ヶ所，焼土範囲が1ヶ所検出された。出土遺物は平安時代の土師器が中心であった。

本調査の経過

確認調査の結果，82㎡が記録保存の対象となったため，準備の整った平成10年11月11日から表土剥ぎを行い，調査を開始した。同年12月14日にすべての調査を終了した。遺物の水洗・注記作業は，同月22日まで実施した。

日記抄

11月11日（水）　ミニバックホウ搬入。表土剥ぎ開始。
11月16日（月）　器材搬入　プラン検出。木根撤去。
11月18日（水）　方眼測量実施。遺構調査開始。
11月19日（木）　1～3号遺構調査。各区掘削。1号遺構出土状況の写真と実測。炭化材検出。
11月25日（水）　1～3号遺構調査。1号遺構炭化物検出。焼土範囲検出。2号遺構カマド検出。
11月26日（木）　1～3号遺構調査。1号遺構炭化物実測，取り上げ。床面検出中。2号遺構カマド調査。
11月30日（月）　1～2号遺構調査。1号遺構床面検出，精査，床面写真，2号遺構カマド写真
　　3号遺構　各区掘削，遺構でないと判断。
12月　1日（火）　1～2号遺構調査。1号遺構床面測定。カマド土層調査。2号遺構1/10カマド平面実測。
　　全測図測定。
12月　3日（木）　1～2号遺構調査。1号遺構カマド調査，分層，写真，実測。完掘中。ピット掘削中。
12月10日（木）　1～2号遺構調査。1号遺構エレベ実測。カマドソデ断ち割り。1号，2号遺構図面チェック。
12月11日（金）　1～2号遺構調査。1号遺構カマドソデ断ち割り。平面図補測。
12月14日（月）　1～2号遺構掘り方完掘。調査区全景写真
12月15日（火）　器材撤収。土器洗い実施。

調査の方法

調査区域が82㎡と小範囲であったが，重機により表土剥ぎを行った。

確認調査では任意で設置したトレンチにより，遺構検出を行っていたが，川崎山遺跡全体で遺構の検出状況を把握する必要があると判断され，位置を確定するため，公共座標により方眼を組み，これを基準とした。遺物の取り上げは光波測距儀により測定し，遺構の測量は現地に方眼を組み計測した。いずれの場合も公共座標を基準としている。

公共座標は例言にも触れているが，測量法改正以前のため，日本測地系に基づいて設置されている。水準測量についても同様に杭に標高を取り付けて計測している。

遺構の名称は確認調査で検出された平安時代の住居跡3軒，時期不明の硬化範囲及び焼土範囲それぞれ1ヶ所あったが，表土剥ぎが完了した段階で検出された遺構が住居跡2軒，遺構らしい落ち込み1基となり，それぞれ東側から1号，2号，3号と呼称して調査を開始した。

遺構の調査は土層観察のため中央にベルトを十字に残し，各区を掘り下げることとした。遺物はできる限り出土した地点に残し，位置と深さの測定をした後取り上げた。微細な遺物については一括で取り上げている。

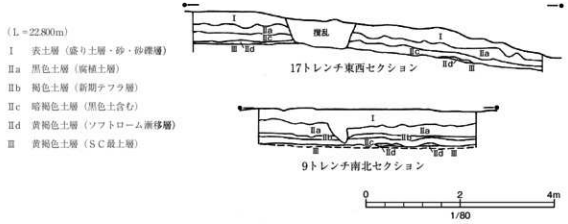
カマドの調査は住居跡調査の最後に行われた。煙道を通る方向で二分割し，カマドの埋没状況を確認している。

掘り方の調査は，検出された床面上では柱穴が検出されなかったこともあり，カマド調査完了後，貼り床を撤去し掘り方の調査を行った。

遺構確認面と土層

遺構の確認面はソフトローム面まで掘り下げている。しかし，傾斜地であったため，遺構の南側は黒色土中に床壁が構築されていたものとみられ，バックホーによる表土剥ぎにより消失してしまった。

基本土層は確認調査時のトレンチの土層をもって記載する。



第5図　調査区の基本土層

川崎山遺跡関連文献

a 地点　　八千代市遺跡調査会　1980　『萱田町川崎山遺跡発掘調査報告　八千代市都市計画街路3-4-1号線建設工事に伴う発掘調査報告書』
b 地点確認　八千代市教育委員会　1992　『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告　平成3年度』
　　八千代市教育委員会　2002　『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書I』
c 地点確認　八千代市教育委員会　1994　『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告　平成5年度』
　　八千代市遺跡調査会　1999　『千葉県八千代市　川崎山遺跡　―埋蔵文化財発掘調査報告書―』
d 地点・e 地点確認　八千代市教育委員会　1998　『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成9年度』
d 地点　　八千代市遺跡調査会　2003　『千葉県八千代市　川崎山遺跡 d 地点　―萱田町川崎山土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財発掘調査報告書―』
f 地点確認　八千代市教育委員会　1999　『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』
g 地点確認　八千代市教育委員会　1999　『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成11年度』
h 地点・i 地点確認　八千代市教育委員会　2000　『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』
h 地点　　八千代市遺跡調査会　2004　『千葉県八千代市　川崎山遺跡 h 地点発掘調査報告書　―店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書―』
j 地点確認　八千代市教育委員会　2003　『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』
k 地点確認　八千代市教育委員会　2008　『千葉県八千代市逆水遺跡 f 地点，北裏畑遺跡 b 地点，高津新田遺跡 c 地点，西山遺跡 b 地点，c 地点，
　　内野遺跡 b 地点，役山遺跡 a 地点，川崎山遺跡 k 地点，ヲサル山遺跡 b 地点　―不特定遺跡発掘調査報告書V―』
k 地点　　八千代市遺跡調査会　2006　『千葉県八千代市　川崎山遺跡 k 地点　―宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
l 地点確認　八千代市教育委員会　2008　『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成19年度』
m 地点　　八千代市教育委員会　2008　『千葉県八千代市　川崎山遺跡m地点発掘調査報告書』

なお，周辺遺跡の主要な参考文献は第3章末に掲載

第Ⅱ章　調査の成果

本調査の対象とされた遺構は5ヵ所であったが，各遺構の調査により平安時代の竪穴住居跡が2軒のみ検出される結果となった。表土剥ぎにより，1号住居跡の南側で重複していると想定されていた遺構は時期不明の硬化範囲とつながったものの，さらに内部を調査した結果，自然の落ち込みと判断された。また，焼土範囲として検出された遺構も最終的には遺構とは判断されなかった。

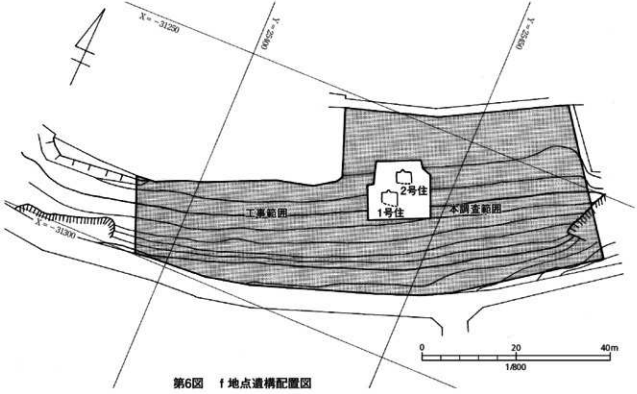
出土遺物は確認調査で91点，本調査では住居跡内出土遺物で348点あり，総数439点であった。内訳では土師器が414点で大半を占めていたが，須恵器は3点しか出土していない。灰釉陶器が4点出土し，1個体に接合された。弥生土器は4点出土している。その他に軽石1点，礫5点，鉄滓1点，滑石2点，焼土塊・粘土塊5点が出土している。また，縄文土器の出土は全くみられなかった。

第3表　川崎山遺跡ｆ地点　検出遺構一覧

（　）推定値　〈　〉現存値

遺構名称	略称	種別	規模（m）			平面形態	主軸方位	カマド	時代・時期	備考
			主軸	副軸	深さ					
1号住居跡	01D	竪穴住居跡	〈2.8〉	3.4	0.28	方形か	N20°W	カマドF1（北西壁中央）	平安時代	南東壁床欠
2号住居跡	02D	竪穴住居跡	〈2.3〉	3.26	0.20	方形か	N28°W	カマドF1（北西壁中央）	平安時代	南東壁床欠

＊住居跡の主軸はカマドを通る軸とし，規模は相対する各壁の中点を結んだ線上の壁間を計測した。また，主軸の方位は座標北からの角度とした。



第6図　ｆ地点遺構配置図

第１節　竪穴住居跡

調査対象区域のほぼ中央で2軒の竪穴住居跡が検出された。相互の間隔は2mほどで近接して構築されている。これらの住居跡の立地傾向は，調査区自体が台地縁辺に所在していることもあり，住居跡も急傾斜地際で検出されている。2軒の住居跡とも南東壁側の床と壁面が黒色土中に構築されていたため，検出することができなかった。

１号住居跡（01D）（第7図～第10図・図版1～3）

位置　調査区内中央。台地南端の傾斜地。2号住居跡の南側約2mの地点。

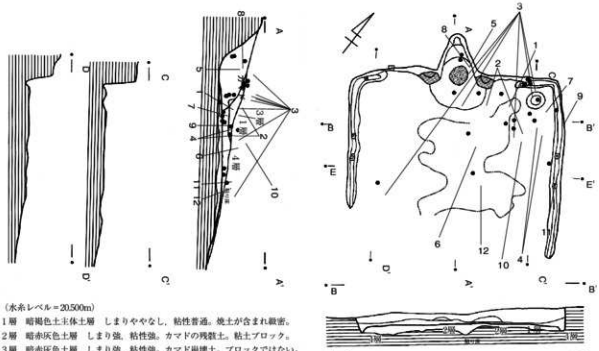
形状　方形か。住居跡南東側が斜面で検出されなかったため不明。

規模　（主）×（副）×（深さ）　〈2m80cm〉×3m40cm×28cm

主軸方位　N20°W

土層　炭化粒子や炭化材片を多量に混入する黒色土層（4層）が床面全体を覆い，その上層に暗褐色土層（1層）が堆積している。焼却または焼失後に人為的に埋め戻しされたものと推測された。

内部構造　**床面**はハードロームブロックを主体とする貼り床で形成されていた。全体に平坦で良く踏み固められている。カマド前面にとても硬く踏み固められた**硬化面**が検出されている。床面上には炭化物が多く，床面自体もところどころに小範囲の赤く焼土化した個所もみられた。**壁面**はほぼ垂直に立ち上がる。**周溝**は南東壁側が検出されていないため全容は不明だが，カマド部分とその周辺以外はめぐっている。主柱穴は貼り床を撤去したが検出されていない。周溝内に**壁柱穴**が6ヵ所検出されている。北隅に



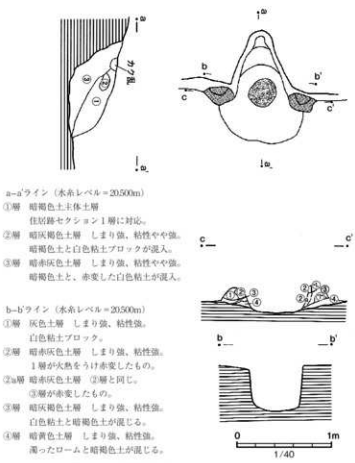
第7図　１号住居跡

浅い皿状の**ピット**が検出されているが，用途は不明である。

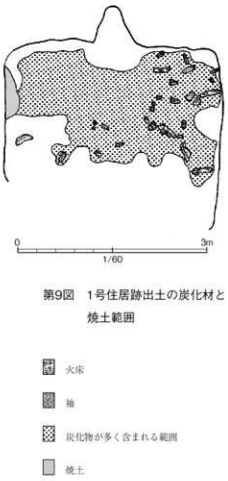
カマド　北西壁中央に付設。天井部及び袖の大半が崩落した状況であった。構造は**煙道**として幅約60cmで壁面を60cmほど掘り込んでいる。煙道の壁面は火熱を受け真っ赤に変色し，焼土化が激しかった。**袖**は煙道両側に18cm～20cmほど残存し，白色粘土を主体に構築されていた。**火床**は袖間から煙道内部に奥行き約105cm，幅約110cm，深さ7cmほどの浅いピットがみられ，その底面に28cm×30cmの範囲で検出された。火床及び浅いピット内も火熱により焼土化が激しい。

遺物出土状況　出土遺物は総数237点。内訳は232点が土師器，須恵器が1点，粘土塊4点であった。出土状況はカマド東側にやや多く出土する。調査時の観察では炭化物が混入する床面直上層である4層での遺物の出土は少なく，その上層からの出土が多い。ほとんどが小片であった。土師器の甑3は，南西壁側床面直上より出土する。坏7，9，甕4は北隅にまとまって，床面直上からの出土であった(図版2-2)。

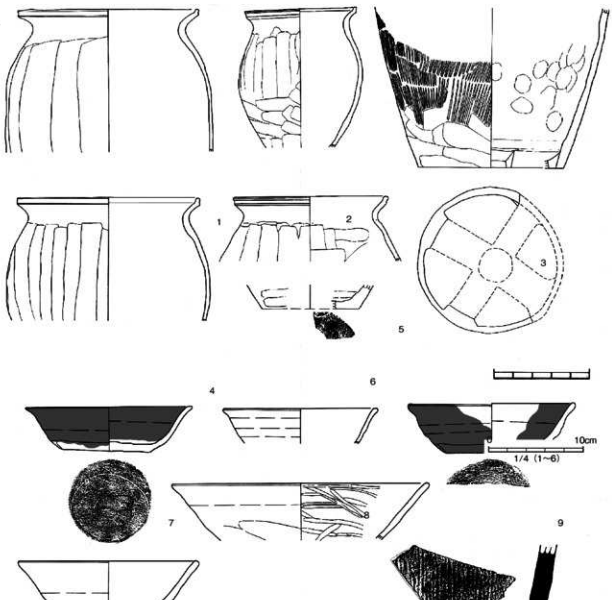
炭化材の出土状況は，カマド前面に広範囲に広がり，床面に密着して出土していた。炭化材はほとんどが砕片であり，カヤ材などはみられない。焼土は炭化材の範囲内にはみられず，南西壁にへばりつくように検出されるのみであった。



第8図　1号住居跡カマド



第9図　1号住居跡出土の炭化材と焼土範囲



第10図　1号住居跡出土遺物

第4表　1号住居跡出土遺物観察表(1)

（　　）復元値　〈　　〉現存値

No.	器種	計測値(cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	遺物No.
1	土師器 甕	口径	19.0	膨らみの少ない胴部 頸部で「く」の字状に屈曲　口縁でつまみあげて直立	胴部外面は縦位のヘラケズリ，口縁内外に横ナデ	雲母・長石粒子を混入 外）にぶい橙　7.5YR7/3 内）橙　7.5YR7/6 内外共に黒変　良好	残存率　50%	50
		底径	—					
		器高	(14.9)					
		最大径	(23.6)					
2	土師器 甕	口径	11.6	底部欠損　緩やかに膨らむ胴部，頸部で「く」の字状に屈曲，口縁つまみ	胴部外面は上半に縦位のヘラケズリ，下半に横方向のヘラケズリ，口縁内外には横ナデ。内面はナデのようであるが不明	微細な雲母粒を含む 外）灰褐　7.5YR6/2 内）黒褐　7.5YR3/1 良好	残存率　90%	31，49
		底径	—					
		器高	(14.4)					
		最大径	13					
3	土師器 甕	口径	—	底部を切り取り穿孔 胴部は底部から直線的に立ち上がる	胴部外面は叩き整形後，底部付近に横方向のヘラケズリ。内面は叩き整形のためのあて具痕が残る。	微細な白色粒子を多く含む 外）灰褐　7.5YR6/2 内）褐灰　7.5YR6/1 良好	底面は残存率が悪いが，十字に削り残し 残存率　25%	2，3，23，29，34，40，56，72
		底径	(15.0)					
		器高	(16.7)					
		最大径	—					

第5表　1号住居跡出土遺物観察表(2)

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値(cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	遺物No.
4	土師器 甕	口径	19.0	底部欠損　緩やかに膨らむ胴部。頸部で「く」の字状に屈曲，口縁つまみあげて直立	胴部外面は縦位のヘラケズリ，口縁内外に横ナデ。内面胴部は調整が激しく調整不明　外面ヘラケズリは止めの弱く，ある程度乾燥してから削っている	砂粒を含む 外）にぶい橙　7.5YR7/3 内）にぶい橙　7.5YR7/3 良好	内面の口縁及び胴部にスス付着 残存率　30%	55，51
		底径	—					
		器高	(12.9)					
		最大径	(21.0)					
5	土師器 甕	口径	(16.0)	口縁部の一部のみ残存。頸部で「く」の字状に屈曲，口縁はつまみあげて直立	口縁内外ヨコナデ，胴部外面は縦方向のヘラケズリ　胴部内面は横方向のヘラケズリ	金雲母粒子を多く含む 外）にぶい橙　7.5YR7/3 内）赤橙　10R6/8 良好	残存率　5%未満	81
		底径	—					
		器高	(6.8)					
		最大径	—					
6	土師器 甕	口径	—	底部の一部を残存　底面から直線的に立ち上がる	底部周辺は横方向のヘラケズリ，内面は輪積み痕を残す。	微細な長石，石英粒子を含む 外）黒褐　5YR3/1 内）黒　7.5YR1.7/1 良好	残存率　5%未満	36
		底径	(10.0)					
		器高	(2.4)					
		最大径	—					
7	土師器 坏	口径	13.0	完形。大きく開き気味に立ち上がり，口縁外反。	ロクロ成形　体部下端を手持ちヘラケズリ。底面には回転糸切痕をわずかに残すが，大半をヘラケズリ	金雲母粒を含む 外）にぶい黒　7.5YR6/3 内）にぶい橙　7.5YR7/4 内外面黒色　良好	残存率　100%	54
		底径	6.9					
		器高	3.7					
		最大径	—					
8	土師器 坏	口径	(12.0)	口縁部の一部残存。口縁わずかに外反。	ロクロ成形　口縁内外面に横ナデ	微細な金雲母を多量に含む 外）橙　7.5YR7/6 内）橙　7.5YR7/6 良好	残存率　10%	79
		底径	—					
		器高	(2.8)					
		最大径	—					
9	土師器 坏	口径	(13.0)	口縁部から底部まで約半分残存　底部から内湾気味に立ち上がり，口縁で外反	ロクロ成形　体部下端を手持ちヘラケズリ　底面には回転糸切痕を残すが，外縁にヘラケズリ	白色粒子を多量に含む 外）にぶい橙　7.5YR7/4 内）にぶい橙　7.5YR7/4 内外面黒色　良好	内側の器面が荒れて剥落する 残存率　45%	53
		底径	(7.0)					
		器高	3.9					
		最大径	—					
10	土師器 坏	口径	(20.0)	口縁部残存。体部は大きく直線的に開く。	ロクロ成形　体部下端を手持ちヘラケズリ　内面斜方向の乱雑なミガキ	微細な雲母を多量に含む 外）にぶい橙　7.5YR7/4 内）にぶい橙　7.5YR7/4 良好	残存率　20%	22
		底径	—					
		器高	(4.5)					
		最大径	—					
11	土師器 坏	口径	(14.0)	口縁部残存。体部は内湾気味に大きく開く。	ロクロ成形　内面ミガキか	微細な雲母粒子・長石粒子を含む 外）橙　7.5YR7/6 内）橙　7.5YR7/6 良好	残存率　5%	21
		底径	—					
		器高	(5.0)					
		最大径	—					
12	須恵器 甕	口径	—		外面はタタキ調整	長石を多く含む 外）褐灰　10YR6/1 内）褐灰黄　2.5Y5/2 良好	外面にスス付着 残存率　5%未満	46
		底径	—					
		器高	—					
		最大径	—					

2号住居跡（02D）（第11図～第14図・図版2，4）

位置　調査区内中央。台地南端の傾斜地。1号住居跡の北側約2m。

形状　方形か。住居跡南東側が斜面で検出されなかったため不明。

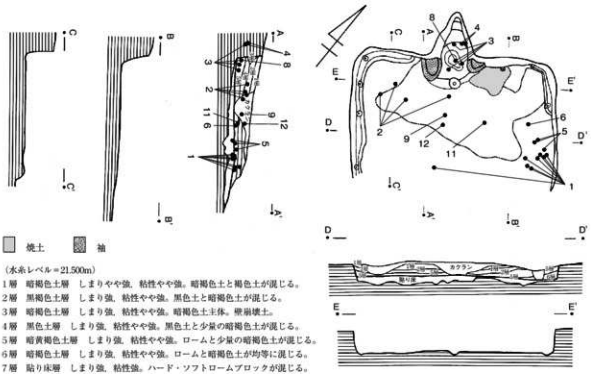
規模　（主）×（副）×（深さ）　〈2m30cm〉×3m26cm×20cm

主軸方位　N28°W

土層　緩やかな自然埋没。覆土は傾斜地のため，台地上面の北側から流入する傾向がみられる。

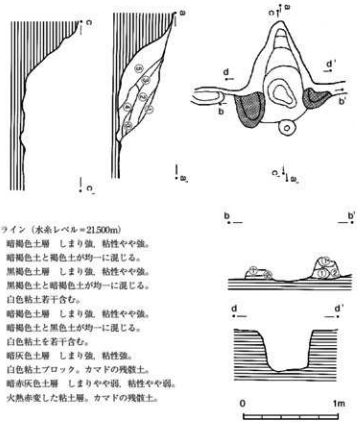
内部構造　**床面**はハードロームのブロックを主体とする貼り床で形成されている。全体に平坦で良く踏み固められている。カマド前面にとても硬く踏み固められた**硬化面**が検出されている。床面上にはカマド脇の少量の焼土を除いて，他に焼土や炭化材は全く確認されていない。**壁面**は崩落している部分もあるが，ほぼ垂直に立ち上がる。**周溝**は南東壁側が検出されていないため不明だが，カマド部分とその周辺には検出されず，部分的に浅い窪み状に巡る状況であった。**主柱穴**は貼り床を撤去したが検出されていない。周溝内に**壁柱穴**7ヵ所が検出されている。

カマド　北西壁中央に付設される。天井部及び袖の大半が崩落している。構造は**煙道**として幅約70cmで壁面を外側に70cmほど途中に段差をもちながら，なだらかに掘り込まれている。煙道の壁面は火熱を



（水糸レベル＝21.500m）
1層　暗褐色土層　しまりやや強，粘性やや強。暗褐色土と褐色土が混じる。
2層　黒褐色土層　しまり強，粘性やや強。黒色土と暗褐色土が混じる。
3層　暗褐色土層　しまり強，粘性やや強。暗褐色土主体。壁崩壊土。
4層　黒色土層　しまり強，粘性やや強。黒色土と少量の暗褐色土が混じる。
5層　暗黄褐色土層　しまり強，粘性やや強。ロームと少量の暗褐色土が混じる。
6層　暗褐色土層　しまり強，粘性やや強。ロームと暗褐色土が均等に混じる。
7層　貼り床層　しまり強，粘性強。ハード・ソフトロームブロックが混じる。

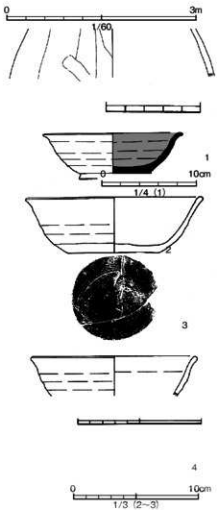
第11図　2号住居跡



a–a'ライン（水糸レベル＝21.500m）
①層　暗褐色土層　しまり強，粘性やや強。
暗褐色土と褐色土が均一に混じる。
②層　黒褐色土層　しまり強，粘性やや強。
黒褐色土と暗褐色土が均一に混じる。
白色粘土若干含む。
③層　暗褐色土層　しまり強，粘性やや強。
暗褐色土と黒色土が均一に混じる。
白色粘土を若干含む。
④層　暗灰色土層　しまり強，粘性強。
白色粘土ブロック。カマドの残骸土。
⑤層　暗赤灰色土層　しまりやや弱，粘性やや弱。
火熱赤変した粘土層。カマドの残骸土。

b–b'ライン（水糸レベル＝21.500m）
①層　暗灰色土層　しまり強，粘性強。
濁った白色粘土を主体とする。少量の山砂を含む。
②層　暗灰褐色土層　しまり強，粘性強。
濁った白色粘土と山砂，暗褐色土が混ざる。

第12図　2号住居跡カマド

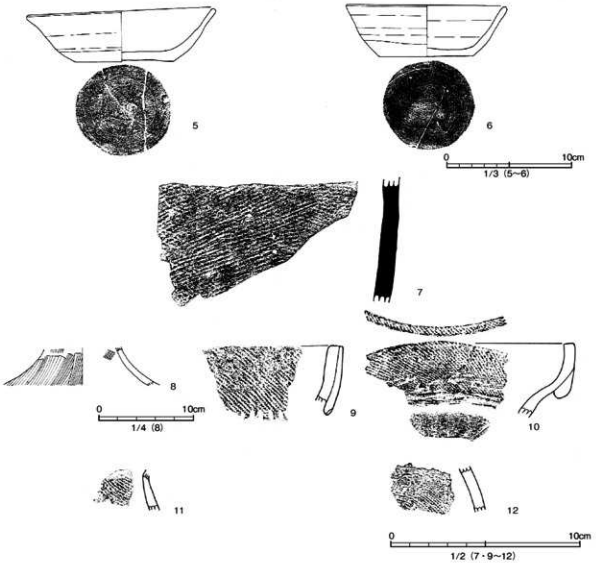


第13図　2号住居跡出土遺物（1）

受け真っ赤に変色し，焼土化しているところもみられる。**袖**は煙道両側に20cm～35cmほど残存し，白色粘土を主体に構築される。**火床**は袖間から煙道内部に奥行き約60cm，幅約40cm，深さ2cmほどの浅いピットがあり，その内部に火熱を受けていたが，火床として赤く変色した部分は確認できなかった。火床の前面に径約17cm，深さ約4cmの小ピットを検出している。用途は不明である。

遺物出土状況　出土遺物は少なく，小破片がまばらに出土している。下層からの出土が多く，上層・中層からの出土はほとんどみられなかった。出土遺物は総数111点。内訳は土師器が102点，須恵器が2点，灰釉陶器が4点(接合し，1個体となった。)，弥生土器が3点であった。土師器では甕1と坏5，6が北東壁際の床面直上にまとまって出土していた。坏6は床面直上で伏せて置かれた状態で出土する。坏3，4はカマド内からの出土であった。灰釉陶器の高台坏2はカマド前面の中層に分散していた。

焼土はカマド脇の床面に接して検出されている。暗褐色土中に焼土が少量混じる程度のものであった。



第14図　2号住居跡出土遺物（2）

第6表　2号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値(cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	遺物No.
1	土師器 甕	口径	(17.0)	胴下半欠損　頂部で「く」の字状に屈曲口縁つまみあげて直立	胴部外面は縦位のヘラケズリ，口縁内外に横ナデ。胴部内面はナデ整形。	長石粒子を多く含む 外）橙　　2.5YR7/6 内）橙　　2.5YR6/8 良好	残存率　10～20%	39, 41, 34, 35, 36, 13, 14, 33
		底径	—					
		器高	(99)					
		最大径	—					
2	灰釉陶器 高台坏	口径	11.0	底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり，口縁で大きく外反　短く高台を付ける	ロクロ成形　内面に灰釉	非常に緻密。白色・石英粒子を若干含む 外）黄灰　　2.5Y6/1 内）灰オリーブ　2.5Y5/3 良好	残存率　98%	17, 18, 19, 29
		底径	57					
		器高	37					
		最大径	—					
3	土師器 坏	口径	(14.0)	口縁でやや肥厚し，わずかに外反。	ロクロ成形 体部下端手持ちヘラケズリ 赤彩後，底面の大半をヘラケズリ	金雲母粒子を混入 外）橙　　7.5YR6/6 内）にぶい橙　7.5YR7/3 良好	残存率　25%	48, 49, 50, 51, 59, 一括
		底径	(7.0)					
		器高	4.3					
		最大径	—					
4	土師器 坏	口径	(13.0)	底部欠損	ロクロ成形。	金雲母粒子を多く含む 外）橙　　5YR6/6 内）橙　　5YR6/6 良好	残存率　25%	56, 58
		底径	—					
		器高	(3.1)					
		最大径	—					
5	土師器 坏	口径	(15.0)	大きく開きながら，口縁でわずかに外反。	ロクロ成形 体部下端を手持ちヘラケズリ 底面は回転糸切り	砂粒を非常に多く含む 外）浅黄橙　7.5YR8/4 内）浅黄橙　7.5YR8/4 良好	残存率　75%	23, 37, 40, 一括
		底径	7.6					
		器高	4.2					
		最大径	—					
6	土師器 坏	口径	—	やや内湾気味に開く，口縁もそのまま。	ロクロ成形 体部下端を手持ちヘラケズリ 底面は回転糸切後，外周をヘラケズリ	金雲母粒子を多く含む 外）にぶい橙　7.5YR7/3 内）にぶい橙　7.5YR7/4 良好	残存率　60%	2, 45, 一括
		底径	(10.0)					
		器高	(2.4)					
		最大径	—					
7	須恵器 甕	口径	—		外面はタタキ整形	長石粒子を多く含む 外）黄灰　　2.5Y6/1 内）灰　　5Y5/1 良好		一括
		底径	—					
		器高	—					
		最大径	—					
8	土師器 器台	口径	—	脚部片	外面ハケ整形，後赤彩。 内面もハケの後に赤彩。	微細な白色粒子及び雲母粒子を含む 外）赤　　10R5/8 内）赤　　10R5/8 良好	残存率　5%	51
		底径	—					
		器高	(3.0)					
		最大径	—					
9	弥生土器 壺	口径	—	折返しによる二重口縁。	口縁外面は単節RL施文 二重口縁下端に刻み　内面は赤彩。	長石・石英粒子を多く含 外）にぶい橙　7.5YR7/4 内）赤　　10R5/6 良好	トレンチ出土遺物第15図と接合	28
		底径	—					
		器高	—					
		最大径	—					
10	弥生土器 壺	口径	—	折返しによる二重口縁。	口縁外面は無節L施文後，横方向のハケ整形 口唇部にも無節L を施文 内面はミガキ調整	緻密 外）にぶい橙　7.5YR7/4 内）明赤褐　2.5YR5/6 良好	頂部に赤彩	一括
		底径	—					
		器高	—					
		最大径	—					
11	土師器 器台か	口径	—		外面ハケ整形の後，ナデ。 一部に赤彩。内面はナデ。	緻密 外）赤　　10R5/8 内）橙　　7.5YR7/6 良好		4
		底径	—					
		器高	—					
		最大径	—					
12	弥生土器 甕	口径	—		ハケ整形が地に見られる。 RのS字状結節文。 附加条縄文RL+2Rを施文。	石英粒子・長石粒子を含む 外）浅黄橙　7.5YR8/6 内）にぶい橙　7.5YR7/4 良好		27
		底径	—					
		器高	—					
		最大径	—					

第２節　遺構外出土遺物

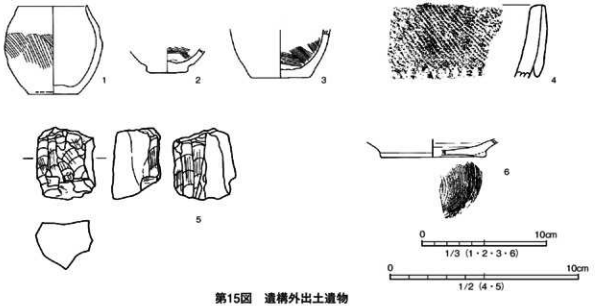
遺構以外から出土した遺物は，確認調査においてトレンチから出土した91点の遺物である。本調査では調査範囲が狭かったこともあり，全く出土を確認していない。出土遺物の内訳は土師器が80点，弥生土器1点，軽石1点，礫5点，鉄滓1点，滑石2点，焼土塊1点であった。弥生土器の1点，4は18トレンチから出土し，これは2号住居跡の遺物と接合した。

土師器は平安時代のものばかりでなく，古墳時代のものも多くはないが含まれている。土師器の出土数は4トレンチで28点，6トレンチで1点，7トレンチで13点，13トレンチで13点，14トレンチで2点，18トレンチで23点であった。

第7表　遺構外出土遺物観察表

（　　）復元値　〈　　〉現存値

No.	器種	計測値(cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土位置
1	土師器 小形壺	口径	(5.5)	球形の胴部に内傾する短い口縁，口唇でつまみあげて突出	口縁から胴部上位まで横ナデ 胴部中位にはハケ整形が残存するが，下半は調整して不明	白色粒子を多く含む 外）橙　5YR7/8 内）にぶい橙　7.5YR7/4 良好	残存率　70%	13トレンチ
		底径	4.0					
		器高	7.0					
		最大径	7.6					
2	土師器 小形壺か	口径	—	底部を突出させ段差をつける底部片 球形の胴部か	外面はハケ整形痕にナデ 内面はハケ整形	白色粒子を含む 外）にぶい橙　7.5YR7/4 内）橙　5YR7/6 良好	残存率　5%	13トレンチ
		底径	3.0					
		器高	(1.9)					
		最大径	—					
3	土師器 小形壺	口径	—	胴部下半　胴部球形	外面はナデ整形　内面はハケ整形 ハケは10単位	白色粒子を含む 外）橙　5YR7/6 内）橙　2.5YR6/8 良好	残存率　30%	13トレンチ
		底径	4.4					
		器高	(3.9)					
		最大径	—					
4	弥生土器 壺			折返しによる二重口縁	外面に単節RL を施文 二重口縁下端に刻み 内面はミガキ，赤彩される。	微細な白色粒子を多く含む 外）にぶい赤　7.5YR7/4 内）赤　10R5/6 良好	2号と接合	18トレンチ
5	石板					滑石		10トレンチ
6	土師器 高台坏	口径	—	高台坏の底部の一部を残存	ロクロ成形　底面は回転糸切痕が残り，外縁に低い高台を残す	微細な白色粒子を含む 外）にぶい橙　7.5YR7/4 内）にぶい橙　7.5YR6/3 良好	残存率　20%	4トレンチ
		底径	(8.4)					
		器高	(1.5)					
		最大径	—					



第15図　遺構外出土遺物

第Ⅲ章　まとめ

川崎山遺跡ｆ地点本調査で検出された遺構は最終的に平安時代の竪穴住居跡が2軒のみであった。この2軒は極めて近接しており，立地，住居跡の規模，カマドの付設，住居跡の主軸方向等いずれも同様の傾向を示していた。

出土遺物は，古墳時代の土師器も多少含まれていたが，遺跡の主体となる平安時代の土師器が最も多く出土していた。須恵器はわずか3点のみで，破片でしか出土していない。1点だけ灰釉陶器が完形で出土している。弥生土器は4点とわずかに出土しているが，縄文土器は全く確認できなかった。

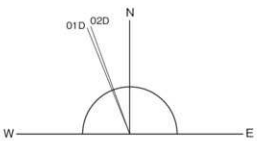
今回の調査の成果

住居跡の形状と規模

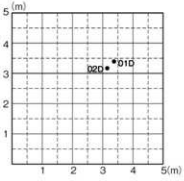
立地は検出された2軒とも台地南側斜面の傾斜地に面して検出されている。そのため，傾斜地側の床・壁の一部を検出することができなかった。規模を比較すると主軸方向での長さは不明であったが，それに直行する軸では，1号住居跡3.4m，2号住居跡3.26mとほぼ同じ規模の住居跡と推定された。また，主軸方位では1号住居跡が N20°W，2号住居跡が N28°Wとほぼ同様の方向を示している。内部構造についても住居跡2軒ともカマドが北西壁中央に付設され，周溝がカマド周囲を除いて巡っている。また，主柱穴は2軒とも検出されていない。住居跡の南東側が未検出のため，出入口ピットは2軒とも不明であった。

以上のとおり，検出された2軒の住居跡はほぼ同様の立地・形状・構造をしていたものの，相違点もみられた。1号住居跡の内部に多量の炭化材とその破片が床面一帯に散乱し，焼失後に埋め戻された状況が伺われた。一方，2号住居跡は住居跡廃棄後に自然埋没している。また，1号住居跡の遺物は覆土上層からの出土が多く見られたが，2号住居跡では下層からの出土が多かった。

第8表　川崎山遺跡ｆ地点　竪穴住居跡比較



住居跡の主軸方位



住居跡の規模　＊形状を方形と仮定して作成

住居跡の出土遺物

住居跡から出土した遺物は1号住居跡で土師器が98%，2号住居跡で91%を占めている。土師器が日常の供膳具の主体を占めていたことを示していると推測される。

器種別の特徴

土師器の坏はロクロ成形で，体部が大きく開き気味に立ち上がり，口縁で外反する。体部下端を

ヘラケズリ，底面は回転糸切後外縁を回転ヘラケズリする。01D7，01D9，02D3，02D5，02D6が該当している。01D8，01D10，01D11，02D4はロクロ成形の坏ではあるが体部下端や底部の一部は不明であった。

土師器の甕は膨らみのない胴部から頸部で「く」の字状に屈曲し口縁端部でつまみあげて直立する口縁をもつ。口縁部内外面を横ナデ，胴部は縦位のヘラケズリをする。01D1，01D4，01D5，02D1が該当する。

土師器の小形の甕は膨らみのない胴部から頸部で「く」の字状に屈曲し，口縁端部でつまみあげて直立する口縁である。口縁部の内外面を横ナデ，胴部上半は縦位のヘラケズリ，下半は横位のヘラケズリをする。01D2のみが確認されている。

土師器の甑は底部から直線的に立ち上がる。胴部外面を叩き整形する。底面は十字に切り欠き甑とする。01D3のみである。

須恵器は外面叩き整形する破片が01D12，02D7など3点のみ出土している。

灰釉陶器は02D2のみである。

出土遺物はおおむね9世紀前半を示し，住居跡としての時期はほぼ同時期と推察されるが，2軒の立地があまり近接していることから，多少の時間差を考慮する必要があるだろう。

川崎山遺跡全体の奈良・平安時代の状況

川崎山遺跡は台地全体をひとつの遺跡として括られている。本跡全体の調査は，13回の調査により80,000㎡以上，遺跡全体の面積の42％ほどが調査対象となり，一部現状保存された区域もあるが，ほとんどが，記録保存の措置がなされている。

現在，この区域では，弥生時代後期から古墳時代を経て平安時代の期間，消長はあるが断続的に集落が営まれてきたことが判明している。

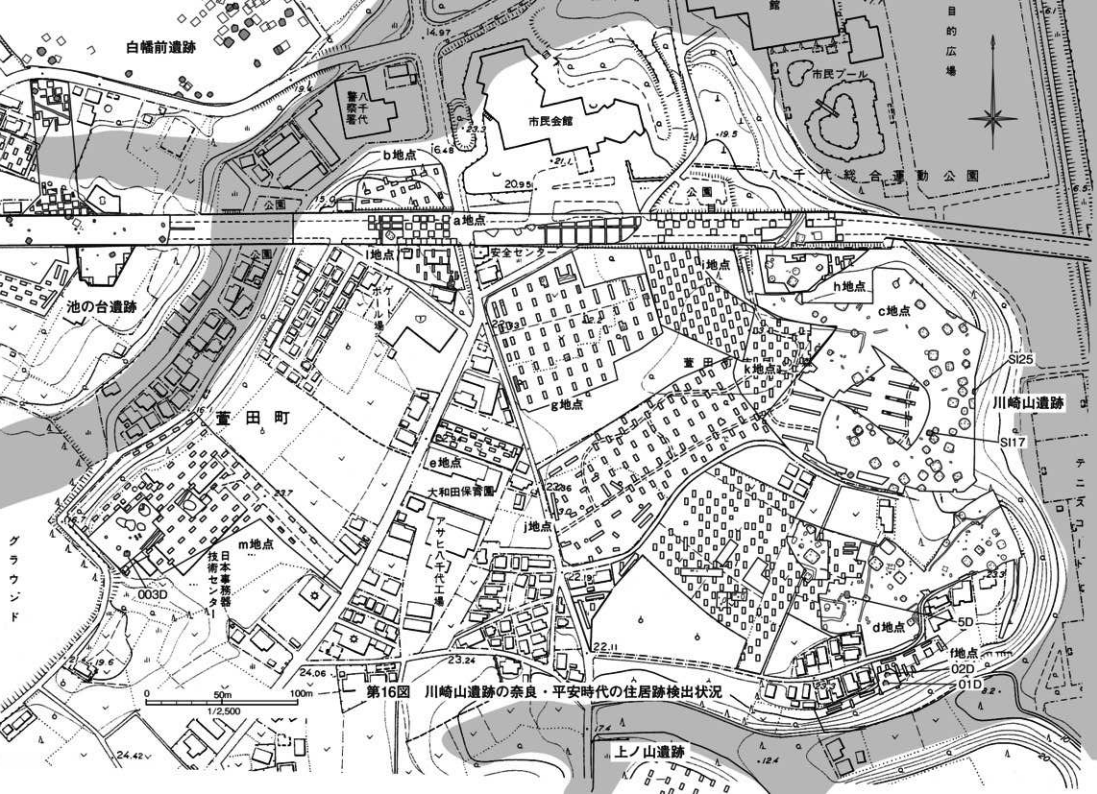
とりわけ，平安時代においては現時点で，6軒の竪穴住居跡が検出されている　（第16図）。遺跡の東端の新川に面するｃ地点で2軒，SI17・SI25が相当する。やはり遺跡の東側のｄ地点では，台地の内部に入ったところで検出された5Dの1軒だけであった。また，最近調査された遺跡西端の池ノ谷津に面するｍ地点では003Dの1軒が検出されている。そして，本報告ｆ地点の2軒で，合計6軒が現時点のすべてである。

遺構の展開は，1軒から2軒程度の少数の建物が広い台地の東・西・南に分散している状況がうかがえる。また時期的には，8世紀代に位置付けられるものが1軒，残りは9世紀代に位置付けられている。台地内部に入ったｅ地点の5Dは遺構の形状も特異であるが，出土遺物も鉄製品や鉄滓が多く，当該報告書で述べられているように「作業場」的な性格が想定される。

川崎山遺跡と周辺の奈良・平安時代の状況

以上のように，奈良・平安時代の川崎山遺跡はその性格は別にしても，閑散とした集落の風景が浮かび上がってきた。しかし，小さな谷津を隔てた対岸には台地全体に白幡前遺跡が濃密に展開している。さらにその北方には台地ごとにいくつもの集落の展開が認められる。時期的にはそれぞれ消長があるものの，それらの集落との関連のなかで，本跡「川崎山遺跡」も形成されたと推察される。

今後も大規模な集落の分析と同時に，隣接する小規模ないしは単独に存在する遺構の検討も重要な集落分析の課題となるであろう。



第16図　川崎山遺跡の奈良・平安時代の住居跡検出状況

参考文献

＊ナンバーは第1図の遺跡ナンバーと同一

1　八千代市遺跡調査会　2007　『千葉県八千代市　勝田大作遺跡　―埋蔵文化財発掘調査報告書―』
2　八千代市遺跡調査会　2003　『千葉県八千代市内込遺跡ｂ地点発掘調査報告書　―宅地造成に伴う埋蔵文化財調査―』
　八千代市遺跡調査会　2001　『千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書　―宅地造成に伴う埋蔵文化財調査―』
3　八千代市教育委員会　1982　『千葉県八千代市高津新山遺跡　―昭和56年度確認調査の概要―』
　八千代市教育委員会　1983　『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅱ　―昭和57年度確認調査の概要―』
　八千代市教育委員会　1984　『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅲ　―昭和58年度確認調査の概要―』
　高津新山遺跡調査会　1990　『高津新山遺跡　出土品展示会』資料
4　八千代市遺跡調査会　1980　『池ノ台遺跡発掘調査報告 1979　八千代市都市計画街路3-4-1号線建設工事に伴う発掘調査報告書』
　八千代市教育委員会　1986　『千葉県八千代市池の台遺跡　―都市計画道路3・3・7号線造成工事に先行する緊急調査―』
　八千代市教育委員会　1998　『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書　平成9年度』
　八千代市教育委員会　2005　『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』
5　(財)千葉県文化財センター　1991　『八千代市白幡前遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―』
　(財)千葉県文化財センター　1994　『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡集　―東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書―』
6　(財)千葉県文化財センター　1987　『八千代市井戸向遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ―』
7　(財)千葉県文化財センター　1993　『八千代市坊山遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ―』
8　(財)千葉県文化財センター　1985　『八千代市北海道遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―』
9　(財)千葉県文化財センター　1984　『八千代市権現後遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―』
　八千代市教育委員会　2007　『千葉県八千代市　権現後遺跡　―公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ―』
　(財)千葉県文化財センター　1993　『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡』
10　八千代市教育委員会　1988　『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和62年度』
　八千代市教育委員会　1989　『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告　昭和63年度』
　八千代市教育委員会　1990　『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告　平成元年度』
　八千代市教育委員会　1996　『八千代市埋蔵文化財調査年報　―平成6年度版―』　平成6年度
　八千代市教育委員会　1997　『八千代市埋蔵文化財調査年報　―平成7年度版―』　平成7年度
11　八千代市遺跡調査会　2007　『千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡　―八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査―』
12　八千代市教育委員会　2000　『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』
　八千代市教育委員会　2003　『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書　平成14年度』
　八千代市教育委員会　2007　『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書』　第22次本調査・第33次本調査
13　(財)千葉県都市公社　1975　『八千代市村上遺跡群』
14　名主山遺跡発掘調査団　1972　『名主山遺跡』
19　八千代市教育委員会　1993　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成4年度』
　八千代市教育委員会　1994　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成5年度』
20　八千代市教育委員会　2003　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成14年度』
　八千代市教育委員会　2004　『千葉県八千代市高津細跡ｂ地点・本郷台遺跡発掘調査報告書』
21　常松成人　2006　『資料館だより　第86号』　船橋市郷土資料館
22・23　八千代市西八千代遺跡群調査会　1996　『千葉県八千代市仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書　―西八千代東部土地区画整理事業―』
　(財)千葉県文化財センター　1989　『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡　―東葉高速鉄道引き込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書―』
　(財)千葉県文化財センター　1994　『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡集　―東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書―』
24　睦小学校北方遺跡調査会　1978　『千葉県八千代市桑納前畑遺跡』
　八千代市遺跡調査会　1981　『千葉県八千代市睦小学校遺跡』
25　八千代市遺跡調査会・船橋市遺跡調査会　1980　『東京電力送電鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書』
26　八千代市教育委員会　2005　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』
　(財)千葉県文化財センター　1998　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1　―八千代市島田込ノ内遺跡―』
　(財)千葉県教育振興財団　2006　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書5　―八千代市島田込ノ内遺跡(2)・間見穴遺跡(3)・道地遺跡(2)―』
27　八千代市遺跡調査会・船橋市遺跡調査会　1980　『東京電力送電鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書』
　八千代市教育委員会　1991　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成2年度』
　(財)千葉県文化財センター　2004　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3　―八千代市間見穴遺跡―』
　(財)千葉県文化財センター　2005　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4　―八千代市間見穴遺跡(2)―』
28・29・30・31・32・33　八千代市教育委員会　1995　『平成6年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』　平成5年度
　八千代市教育委員会　1996　『八千代市埋蔵文化財調査年報　―平成6年度版―』　平成6年度
34　八千代市遺跡調査会・船橋市遺跡調査会　1980　『東京電力送電鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書』
35　八千代市教育委員会　1992　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成3年度』
36　八千代市教育委員会　1997　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成8年度』
37　八千代市遺跡調査会　2001～2005　『千葉県八千代市上谷遺跡』第1分冊～第5分冊、第1分冊本文編
38　八千代市遺跡調査会　2001～2003　『千葉県八千代市栗谷遺跡』第1分冊～第2分冊、第1分冊本文編
38・41・42　八千代市遺跡調査会　2004　『千葉県八千代市栗谷遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡』　第3分冊
39　八千代市遺跡調査会　2004　『千葉県八千代市向境遺跡』
40　八千代市遺跡調査会　2005　『千葉県八千代市境堀遺跡』
43　八千代市教育委員会　1996　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成7年度』
46　(財)印旛郡文化財センター　2001　『千葉県佐倉市　先崎西原遺跡　―信濃寺霊園増設に伴う埋蔵文化財調査―』
61　(財)千葉県文化財センター　2005　『印西市西根遺跡　―県道船橋印西線埋蔵文化財調査報告書―』
63　高津団地遺跡発掘調査団(丸子 亘)　1970　『千葉県八千代市高津遺跡　発掘調査概報』　立正大学博物館学講座研究小報4

1. 遺跡遠景(手前新川)

2. 調査区近景

3. 本調査作業風景

4. 本調査区域　東側より

5. 本調査区域　南西側より

6. 1号住居跡

7. 1号住居跡南北土層

8. 1号住居跡東西土層

図版2

1. 1号住居跡遺物出土状況

2. 1号住居跡北東隅遺物出土状況

3. 1号住居跡カマド土層

4. 1号住居跡カマド

5. 2号住居跡

6. 2号住居跡南北土層

7. 2号住居跡東西土層

8. 2号住居跡カマド

1. 1号住居跡　1

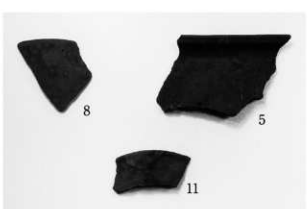
2. 1号住居跡　2

3. 1号住居跡　3

4. 1号住居跡　4

5. 1号住居跡　7

6. 1号住居跡　9



7. 1号住居跡　5·8·11

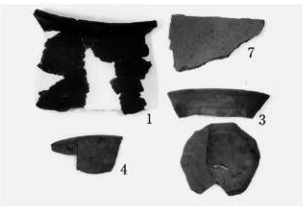
8. 1号住居跡出土遺物

図版４　2号住居跡出土遺物・遺構外出土遺物

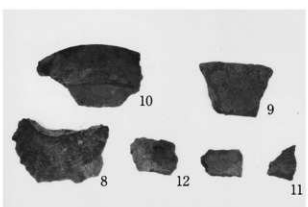
1. 2号住居跡　2

2. 2号住居跡　5

3. 2号住居跡　6

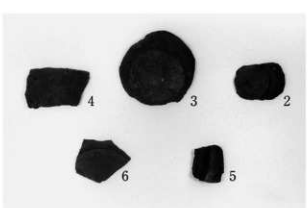


4. 2号住居跡　1·3·4·7



5. 2号住居跡　8·9·10·11·12

6. 遺構外出土遺物　1



7. 遺構外出土遺物　2·3·4·5·6

8. f 地点主要出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし　かわさきやまいせき
書名	千葉県八千代市　川崎山遺跡
副書名	f地点埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	秋山利光
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　　Tel 047-483-1151 内6114
発行年月日	西暦２００８年（平成２０年）１０月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かわさきやま 川崎山遺跡	やちよし　ちばのまち 八千代市茨田町字 かわさきやま 川崎山759の一部	12221	241	35° 43′ 15″	140° 06′ 41″	確認調査 19980806 ～ 19980814 本調査 19981111 ～ 19981214	確認調査 209㎡/1,550㎡ 工事面積　2,784.82㎡ 本調査　82㎡	共同住宅建設
				世界測地系による				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かわさきやま 川崎山遺跡	集落跡	平安時代	平安時代　竪穴住居跡　2軒	弥生土器 古墳時代　土師器 平安時代　土師器，須恵器， 灰釉陶器	

要約	川崎山遺跡は印旛沼水系の新川流域の西岸に位置している。標高22m～24mの下総下位面で形成される台地上に広く展開する。本調査区は遺跡南端の台地の縁に立地している。 調査区から検出された遺構は平安時代に営まれた集落の一部である。調査区では2軒の竪穴住居跡が近接して検出されている。 住居跡からの出土遺物は大半が土師器であり，須恵器はわずか数点の破片しか出土していない。その他，住居跡内に流れ込んだものであるが灰釉陶器が1個体出土する。 その他の出土遺物は，わずかな弥生土器と古墳時代土師器，滑石であった。

千葉県八千代市

川崎山遺跡

―f地点埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成20年10月31日発行

編集　八千代市遺跡調査会
八千代市教育委員会 教育総務課内
千葉県八千代市大和田138-2

発行　杉山　芳子

印刷　有限会社 フジ印刷
千葉県八千代市吉橋1189-5